

京極読書新聞 <第44号>

発行日 平成25年 4月 1日(月)
京極町生涯学習センター湧学館

〈新連載〉羊蹄山の麓で

第1回 京極町

市川森一「ここではない何処か」

新谷保人(湧学館司書)

市川森一脚本のテレビドラマ「ここではない何処か」は、こんな風に始まります。

○ タイトルバック

全面、カラーになって——
「ここではない何処か」
メイン・スタッフ、キャスト。
羊蹄山の山麓の風景が重って——
山間の湧き水(ふき出し公園)。

○ 湧き水の水汲み場

T「八ヶ月前」
作業着姿の遙が、山からの天然水をポリ容器に汲んでいる。
「あった、あった」
と、二人のジーンズ男がポリ容器を下げてやってくる。
村上省一(35)と阿部純次(25)。
遙と並んで湧水を汲む省一に、
純次「ゲツ、山水？ 消毒してないでしょ？」
省一「嫌なら、お前、飲まなくていいよ。そっち早く入れろよ」
純次「(遥に)……お腹壊さない？」
遙「(微笑って無視)……」

市川森一の「メント・モリドラマ集」を読んでいたら、京極町の湧き出し湧水がいきなり出てきてビックリです。なにか、東京の街中で、ぱったり京極町の人に出会ったような不思議な気持ちになりますね。去年度の「京極文学館」で取り上げてもよかったのですが、

けっこう京極町を舞台にした大作がひしめきあっている状態でしたので、今年度の「山麓文学館」の方にまわりました。

『メント・モリドラマ集』
市川森一／ 912.7-イチ



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

山麓文学館。京極町をスタートして、一年かけて、羊蹄山の麓の町村が舞台となった作品を訪ねて行こうと考えています。そんなに山麓を舞台にした作品なんてあったろうか？「有島武郎」以外に誰かいたっけ？と思う人もいるかもしれません。でも、大丈夫。去年だって、およそ九十年の沈黙を破って沼田流人を見つけてきた湧学館ですもの。(たぶん、沼田流人「血の呻き」を完全版で読んだ日本で最初の人たちだと思えます…)今年も、アンテナを張り巡らしてセンスの良い作品を探して行きましょう。

さて、市川森一。「市川森一」の名ではピンと来なくても、最近ならば、あのNHKテレビドラマ「蝶々さん」の脚本を書いた人といった方がわかりやすいかもしれません。映画ならば、あの「長崎ぶらぶら節」。大河ドラマならば「黄金の日」「山河燃ゆ」「花の乱」など、数々の芸術賞に輝く日本を代表するシナリオ作家ですが、惜しくも一昨年の12月に亡くなりました。

それは、彼の傑作を集めた「メント・モリドラマ集」が出版される、わずか一カ月前のことでもありました。今、あらためてこの本を読み返すと、「ここではない何処か」をはじめ、「幽婚」「風の盆から」「銀河鉄道に乗って」「旅する夫婦」「蝶々さん」等々、ひとつとしてハズレのない、質の高い作品群に圧倒されてしまいます。こんなテレビ黄金期と一緒に時代を歩んで来たんだなあ…とちょっとしんみりしました。

山麓文学館 予定作品

- 5/17(金) 第1回 <京極> 市川森一「ここではない何処か」
- 6/14(金) 第2回 <ニセコ> 畔柳二美「青いりんごのふるさと」
- 7/12(金) 第3回 <倶知安> 林芙美子「田園日記」か
<ニセコ> 黒柳二美「こぶしの花の咲くころ」
- 8/ 9(金) 第4回 <岩内> 有島武郎「生れ出づる悩み」
- 10/ 5(土) 後志文学散歩・バスの旅
- 11/ 8(金) 第5回 <喜茂別> 本山悦恵「夕映えの羊蹄山」
- 12/13(金) 最終回<蘭越>(未定/現在、作者と交渉中)の作品か
<留寿都>大沼桂子「多与」

1ページ目からの続きです。

沼田流人とは？

沼田流人(ぬまた・るじん)。明治31年6月生まれ。本名は山本一郎ですが、両親が不在となったため、俱知安村八幡で木賃宿を営む祖父・沼田仁兵衛(母・山本カツの父)の養子となり、沼田一郎となります。のちに、得度して名を一郎から僧名・明三(みょうざん)に改称。以後、もっぱら「明三」を名乗るようになります。「流人」は作家としてのペンネーム。

彼は、胸の上に頭を垂れて、ぼろぼろな小さな家々の靠れかかりあつて並んでゐる、日の光りも当たらないやうな、狭い巷の泥濘路を、のろのろと歩いてゐた。

ひよろ高い痔せた軀に、ひどくぼろけた短い黒外套を纏つて、黒い囊かなぞのやうに、型の頽れたソフトを眼深に被つた下から、肩の上までも長い黒い髪が纏れて、垂れかかつてゐた。その洋袴も、小さな靴も、この所有者のやうに疲れ、破れてゐる代物だつた。

それに、彼の左の肩から垂れてゐる、重たい義手ももう壊れかかつて、惨めな有様になつてゐた。

彼の代表作といわれる小説「血の呻き」の冒頭です。主人公が八月末の函館の貧民窟に登場する場面ですが、なんと、その名が「藤田明三」。沼田流人は、本名の「明三」を主人公に与えているのですね。これは、つまり、「血の呻き」は自分の人生の物語だと宣言しているようなものです。

さらに驚くべきことがもうひとつ。それは、明三の左の肩から垂れている「重たい義手」。(これも、凄い…) 沼田流人は十五歳の時に、近所のマッチ軸木製造工場で友だちとふざけて遊んでいて、あやまって腕をベルトに挟まれてしまい左腕を切断しているのです。若くして片腕の姿を運命づけられた流人のその後の人生は、常人のそれとは決定的にちがったものとなって行くのですが、その沼田流人の象徴でもある「義手」を物語の冒頭に掲げた流人の覚悟のほどを私たちは重たく受けとめなければならないと感じます。

沼田流人読書会について

読書会形式が変わります！

第1、3週金曜日の「平家物語読書会」、第2週の「山麓文学館」に続いて、第4週を「沼田流人読書会」にと考えていたのですが、平成25年度の湧学館カレンダーを見ると、第4金曜日のことごとくが図書館行事に重なっています。このため、今までやってきた読書会形式での開催は難しいと思われ、現在、「沼田流人マガジン」の定期発行とか、年に何回かの臨時読書会などの方法を検討中です。当面、「沼田流人マガジン」を介しての連絡になりますのでご了承ください。(新谷)



大正12年、叢文閣発行の「血の呻き」。湧学館にこの本の完全復刻版(本物よりキレイ!)がありますので、一度見てください。

大盛況、古本市

今年の古本市也大盛況！前日には慶和園・ひまわりクリニック・福祉センターの3施設の入所者や職員の方が来館され、107冊の本が引き取られていきました。

当日は早くから多くの方が湧学館に集まり、開始と同時に本へと殺到しました。結果、雑誌286冊、一般書433冊、児童書193冊が引き取られ、全体で1019冊もの本が新たな活躍の場へと旅立っていきました。

引き取られた冊数は去年には及ばないものの、引き取った人数は去年よりも多く、古本市がより多くの方に認知されていることを体感できた一日でした。どうぞ末永く古本たちを役立ててください！



▲たくさんの方が訪れ大盛況！

▼絵本のコーナー



◀子ども向けイベントの「おはなしめいろ」
たくさん子どもたちが挑戦してくれました。
ゴールできたかな？

◆本のびょういん

今回の来院者は、延べ29人。34冊の本に修理・カバーかけを行いました。内訳は、修理の必要な本が15冊、カバーかけが19冊。

29人の内、約8割は常連の人だったのですが、家族中のカードを集めてできるだけ多くの本を修理したいという人も多く、湧学館の個性「本のびょういん」の存在が町民のみなさんに徐々に広がっているのを感じます。

◆製本教室作品展

例年、歴代の製本作品を展示してきましたが、作品数も増えた事により、今年度からは、現在の製本教室作品の展示に限ることにしました。

それでも、丸テーブル3つにぎゅうぎゅうに並んでいる様は圧巻！

年配方のほとんどが、まず「広報きょうごく 創刊号～200号」の復刻版を手にとる姿が印象的で、若い人は「血の呻き」のような500頁もの大冊を完全復刻できる現在の技量に感嘆の声も聞こえました。

また、製本教室を常設化し「ゆうがくかん出版」のような形で、町民が持っている原稿や資料、湧学館が自館蔵書として必要と判断した資料を手軽に常時書籍化できるような場があればいいのに…という声も聞きました。



◆日鉄鉱業北海道OB会の21名が来館！

3月27日(水)、日鉄鉱業のOB会の方々21名が来館されました。目的は、もちろん、現在1階フロアで行われている「脇方に鉱山があった頃」展の見学です。到着後、さっそく「脇方市街」ジオラマの前に大集合。「この道の先に住んでいたんだ」とか、「この会館で結婚式をあげたんだ」とか、さまざまな思い出話が飛びかっっていました。さすがは鉱山の街の当事者たち。一行の中には、明治31年の鉄鉱石発見者、藤村徳治のお孫さんにあたる方などもいらっしやって、かつて「脇方」と呼ばれた人口7千人の街がたしかに存在していたんだということをまざまざと私たちに伝えてくれました。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

